

## 「晩春に観たい広重の名所絵と俳句」



広重の死絵（三代歌川豊国筆、安政五年（1858年））

「死絵」とは、主に歌舞伎役者が死去したとき、その訃報と追善を兼ねて版行された浮世絵。

めぐり来る季節に合う名画と俳句、第九回目は前回に続き歌川広重（うたがわ ひろしげ）（1797-1858）の『名所江戸百景』から晩春に観たい作品と俳句です。

今回は十一番「上野清水堂不忍の池」では古来より日本人に特別に愛され、葉に先立って花を咲かせ、散り際の桜吹雪も壮観で、国花でもある「桜」を、二十六番「八景坂鎧掛松」では厳しい環境でもよく育ち、「色かえぬ」常緑樹で、緑がういういしい「松」を、五十八番「亀井戸天神境内」では房をなして咲く紫色の蝶形の花の優美さから、古くから栽培観賞されてきた「藤」を、六十番「深川八まん山ひらき」では燃えるような花色を新緑の間からのぞかせ、趣のある景観を見せてくれる「躑躅（つ つじ）」を、六十三番「八ツ見のはし」ではしなやかに垂れ下がった枝が美しく、女性的な風情がある「柳」をと、晩春が見ごろになる植物を描いている絵を選びました。

俳句とともに楽しみ下さい。

# 1. 上野清水堂不忍の池 (うえのきよみずどうしのばずのいけ)

『名所江戸百景』 十一



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100\\_views\\_edo\\_011.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100_views_edo_011.jpg)

十一. 上野清水堂不忍の池 | 安政三年 (1856年) 四月

赤色の建物は上野寛永寺の境内にある清水堂。  
京都の清水寺の舞台を模して建てられたもので、崖の上にせり出すように建てられているため、見晴らしが大変優れていました。

上野の寛永寺は桜の名所として当時有数で、清水堂の周囲も満開の桜に囲まれていたので、見物客たちは桜を上から見下ろすという、その場所ならではの景観を楽しめました。

その清水堂から一望できたのが、目の前に広がる不忍池です。  
池の中には小さな島があり、弁財天が祀（まつ）られていました。  
池の中に描かれている道はその島につながる参道で、神社の入り口であることを示す鳥居も見えます。

また、画面左に枝が曲がって円形となっている松が見えますが、これは昨年 11 月「秋から冬に観たい広重の名所絵と俳句」で取りあげた「上野山内月のまつ」です。  
ご興味がある方は参照して下さい。

大阪の桜は昨日から咲きはじめ、来週が見ごろとの予想。  
ついこの間咲きはじめたかと思ったら、あっという間に満開になり、すぐに散りはじめます。  
桜は古来より日本人に特別に賞美されてきた花で、国花でもあります。  
桜前線の北上とともに、花見の行楽があり、朝桜、夕桜、夜桜、晴れても、曇っても、降っても風情があります。

ここでは、晩春の季語「桜」を詠んだ句を選びました。

世の中は三日見ぬ間に桜かな  
大島蓼太（おおしま りょうた）（1718-1787）

百年のグリコ快走さくら咲く  
泉田秋硯（いずた しゅうけん）（1926-2014）

## 2. 八景坂鎧掛松 (はっけいざかよろいのかけまつ)

『名所江戸百景』 二十六



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100\\_views\\_edo\\_026.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100_views_edo_026.jpg)

二十六. 八景坂鎧掛松 (現在のJR大森駅西口「大森ララ」近傍) | 安政三年(1856年)五月

崖の上に生える、曲りくねった幹をもつ巨大な松が中央に描かれています。  
この松は鎧掛松（よろいかげのみつ）といい、現在のJR大森駅西口前の八景坂の坂上にある神明社の境内にありました。

十一世紀の終わり頃、源義家が奥州征伐の途上、この松に鎧を掛けて休息したところからその名があり、高さは約二十メートルあったといわれます。

この鎧掛松にたどり着くまでの坂が八景坂。

八景とは八つの名所を意味し、この坂からいろいろな名所が見渡せたことを物語っています。  
徒歩で上ってくる人や駕籠（かご）で運んでもらっている人など、坂の上からの眺望を味わいたい人が大勢いたようで、鎧掛松のそばにある茶屋も客足が絶えなかったようです。  
眼下に広がる青い海は江戸湾、遠くは房総半島も望むことができました。  
海岸線に沿った松並木は東海道で、往来する人々の姿もうかがえます。

松は常緑樹で、「色かへぬ」ところが特徴ですが、晩春の頃になると枝先に新芽を幾本も直立させます。  
陽光のなか、晴れ晴れとこぞり立つさまは明るく勢いがあります。

ここではそんな「松のみどり」を詠んだ句を選びました。

古道をみかへる松のみどりかな  
宝井其角（たからい きかく）（1661-1707）

緑なす松や金欲し命欲し  
石橋秀野（いしばし ひでの）（1909-1947）

### 3. 亀戸天神境内 (かめいどてんじんけいだい)

『名所江戸百景』五十八



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100\\_views\\_edo\\_057.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100_views_edo_057.jpg)

五十八. 亀戸天神境内 | 安政三年 (1856年) 七月

藤棚からのびた藤の花をアップで捉え、奥には傾斜のきつい太鼓橋が見えます。  
亀戸天神は江戸で随一の藤の名所です。

太宰府天満宮の神主が神木飛梅（とびうめ）で彫った菅原道真像を祀ったのが始まりとされ、境内には太宰府天満宮に倣（なら）って社殿、心字池、太鼓橋などが造られました。

池のまわりには藤棚が設置され下の縁台には腰掛けている花見客で賑わっています。  
しかし、よく見てみると、本来は太鼓橋の下の空の色が紙の地を生かした白色でなくてはなりません。  
本図では、池と同じ藍色で摺られています。

これは、広重が摺師への指示をミスしたか、摺師の手違いによるものでしょう。  
浮世絵版画が絵師、彫師、摺師の三者によって制作されることを物語る人間らしい一面がうかがえ興味深い失敗です。

なお、このミスは初摺にのみ見られるもので、後摺になると修正されています。

また、印象派の画家クロード・モネは本図に影響され、自宅に太鼓橋のある日本庭園を造り、睡蓮の絵をたくさん描いています。

ここでは、藤色という色の名があるほど古くから人々に愛され、晩春のもの憂い気分に適（かな）った「藤」を詠んだ句を選びました。

藤の花雲の梯（かけはし）かかるなり  
与謝蕪村（よさ ぶそん）（1716-1784）

虎が一匹虎が二匹虎が三匹藤眠る  
金原まさ子（きんばら まさこ）（1911-2017）すごい！！106歳までご存命。

## 4. 深川八まん山ひらき (ふかがわはちまんやまびらき)

『名所江戸百景』 六十



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100\\_views\\_edo\\_059.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100_views_edo_059.jpg)

六十. 深川八まん山ひらき | 安政四年 (1857年) 八月

深川八幡とは富岡八幡宮のことで、神社を管理するための別当寺が永代寺でした。本図の題名は「深川八まん」ですが、実際には富岡八幡宮ではなく、隣接する永代寺の庭園を描いています。

永代寺は、幕府から六万坪余りの寺領を受けていて、隅田川東岸では最大の規模を誇りました。永代寺の庭園は普段は非公開でしたが、弘法大師の命日である旧暦三月二十一日から二十八日（一説には四月十五日までの間（新暦では四月下旬から五月上旬頃）山開きと称して、庶民たちに開放されました。

本図でも今を盛りと咲きほこっている花々を観るために散策する人々の姿があちらこちらに見えます。画面手前のピンク色の花は、山開きのこの時季に咲いているとなると遅咲きの桜と、白い花はしだれ桜でしょうか。また、画面中央より奥の深紅の躑躅（つつじ）も満開です。

ここでは古風ながら身近な感じは庶民の暮らしとよく似合い、「藤」が高い景をつくるのに対して、晩春の山野や庭園を低く彩る「躑躅」を詠んだ句を選びました。

## 盛りなる花曼荼羅（まんだら）の躑躅かな

高浜虚子（たかはま きょし）（1874-1959）

## 庭つつじ庭師の刈りし通り咲く

高田風人子（たかだ ふうじんし）（1926-2019）

## 5. 八ツ見のはし (やつみのはし)

『名所江戸百景』 六十三



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100\\_views\\_edo\\_062.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:100_views_edo_062.jpg)

六十三. 八ツ見のはし | 安政三年 (1856年) 八月

柳が緑鮮やかに垂れ下がり、燕が二羽、画面を横切っています。  
その向こうに見えるのは江戸城。  
はるか彼方にそびえ立つのは富士山です。  
水面には藁（わら）を積んだ船が見え、隣には四手網（よつであみ）を川に沈める漁師の姿があります。

画面左下に大きく描かれているのは一石橋の欄干（らんかん）で、通行する人物の笠が大きく描かれています。  
題名の「八ツ見のはし」とは一石橋の別称です。  
この橋からは文字通り八つの橋を眺めることができました。

正面に見えるのが銭亀橋、その奥が道三橋、本図には描かれていませんが、右手に常磐（ときわ）橋、左手に呉服橋、と鍛冶（かじ）橋、一石橋の後方には日本橋と江戸橋、それに一石橋を加えて八つとなります。

この付近は江戸城の外堀と日本橋川が交差する地点で、多くの通行客で賑わいました。

ここでは緑色の新しい葉をつけた細枝が瑞々（みずみず）しく、たおやかな晩春の季語、「柳」を詠んだ句を選びました。

したがへば嵐も弱る柳かな

荒木田 守武（あらきだ もりたけ）（1473-1549）

逢いたくば芽ぶく柳の許（もと）に来よ

隈 治人（くま はると）（1915-1990）

私も藤の絵から一句詠んでみました。

## 藤垂れて筋肉ゆるみはじめけり

白井芳雄

今回は「晩春に観たい広重の名所絵と俳句」をお届けしました。

「いいテク・ニュース」季語に遊ぶの『名所江戸百景』は今回で一巡しましたので、終了といたします。

次回5月配信分から新しい企画でお届けします。

またのご愛読をお願いいたします。

全体を通じての参考文献、出典：小池満紀子・池田英美著

『広重 TOKYO：名所江戸百景』（講談社）（2017年）

ISBN978-4-06-220507-8

太田記念美術館監修 日野原健司・渡邊晃文

『広重 名所江戸百景』（美術出版社）（2017年）

ISBN978-4-568-10495-0 C3070

安村敏信監修

『広重「名所江戸百景」の旅 あの名作はどこから描かれたのか？』（平凡社）（2014年）

ISBN978-4-582-94568-3

飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修

『カラー版 新日本大歳時記 愛蔵版』（講談社）

ISBN978-4-06-128972-7

『角川俳句大歳時記 夏』（角川学芸出版）

ISBN4-04-621032-X C0392

参考サイト：フリー百科事典ウィキペディア (Wikipedia)

最後までお読みいただきありがとうございました。

(株)技術情報センター メルマガ担当 白井芳雄

本メールマガジンのご感想や本メールマガジンへのご意見・ご要望等 [melmaga@tic-co.com](mailto:melmaga@tic-co.com) まで、  
どしどしお寄せ下さい。

株式会社 技術情報センター 〒530-0038 大阪市北区紅梅町 2-18 南森町共同ビル 3F

TEL : 06-6358-0141 FAX : 06-6358-0134 E-mail : [info@tic-co.com](mailto:info@tic-co.com)